

ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌

Take free!

なっぴ

7月号
vol. 125

特集

西成あり
ゆき 大阪あり

「海に行きたい」
津守1丁目付近にて撮影

特集 お成あり ゆえに大阪あり

4 言語の壁を越えるのは意外とカンタン？

エリオットは名古屋に発った。彼は、わたしたちとは異なるまなざしで西成を捉えてきた。おかげでわたしたちの知らない西成のもう一つの「顔」を教えてくれた。その置き土産を拾い上げ、わたしたちの知らない西成を追跡してみよう。まだ見ぬお隣さんの顔を覗くのは、ちょっとドキドキするけれど。

て家族・親戚の強い紐帯ちゆうたいが読み取れる。

見えない「壁」が
立ちはだかっている

姉の助けを借りながら、福子さんは徐々に日本での生活を築いていく。当時は韓国語で生活していたせいか、天王寺の夜間学校に通ってもあいさつ程度の日本語しか身につかなかった。来日して一年が経つ頃、いよいよ仕事をしなければならなくなった。日本語が分からず仕事をを見つけるのに難儀したが、娘の紹介により焼肉店で会話が必要ない血洗いの仕事に就くことができた。朝9時30分から開店準備をして夜24時まで、終電で帰宅する日々が続いた。仕事は厳しくて苦しかったが、中国で農業をしていた頃と比べると、月給をもらえることは「ありがたかった」と福子さんは振り返る。

焼肉店は3年ほどで閉店し、福子さんは松原の自宅付近で仕事を探しはじめた。ちょうどその頃に



金福子さん

は日本人。母は日本人の前夫と死別し、前夫との間に生まれた長女（姉・高崎美恵子さん）とともに中国黒竜江省に移り住んだ。福子さんは牡丹江のコリアン・コミュニティで生まれ、韓国語を話して育ち、6歳のときに母と死別。中国で夫と結婚すると農業で生計を立てた。

福子さんが来日したのは姉の強い勧めによる。姉・美恵子さんは母に代わって家族を世話し支え続けてくれた心強い存在で、しばし

今回は、「スマイル ゆゑとあい」で毎週水曜日・木曜日の夕方に開催される「西成識字よみかき・日本語教室」（以下「西成教室」と表記）の利用者のうち、日本語での取材が可能な方として主催者に推薦いただいた、二人の在留外国人を紹介する。一人は1952年中国黒竜江省牡丹江市に生まれた金福子さん。1997年に来日、2001年に西成に転入した。日本語を話せないままに来日し定住された生活経験からわたしたちが学ぶことはとても多かった。もう一人はインドのラージャスターン州ジャイプル出身のモディ・プランジャル(MODI-Pranjal)さん。家族は大阪市西区に住んでいるが、彼だけインドの高校に通い、夏休み（2〜3カ月）ごとに日本にやってきては日替わりで複数の日本語学校に通うほど勉学に熱心な17歳である。

きっかけは姉の勧め

金福子さんの父は韓国人で、母

夫が脳梗塞で倒れた。これまでよりも「もう少しお金になる仕事」を探していたとき、中学校の同級生（中国出身）が、西成区の靴職人（韓国出身）に嫁いでいたことがわかった。意を決して、当時転職を考えていた息子とともに「靴の仕事を教えてほしい」と頼み込み、西成の工場で技術を習得することになった。3カ月ほどで独立を勧められ、下請け仕事を自宅でするようになった。01年頃のことである。

夫がさらに体調を崩し、別の仕



一番上の姉（右から2人目）の79歳の誕生日を祝う4姉妹

事を探すことになった福子さん。西成区役所に行つて日本語が就職のネックであることを相談すると、担当者がYWC Aを紹介してくれた。YWC Aでも熱心に日本語を勉強したが、思いのほか身につかなかった。

卒業後、南海天下茶屋駅内にある「しごと情報ひろば」の相談員と面談して、区内の病院の食堂で働くようになった。先の焼肉店と同じく、日本語ができない福子さんに与えられたのは、会話がなくてできる単純ではあるがキツイ洗い場の仕事だった。あたかも「言語の壁」に閉め出されているかのようである。

西成の日本語教室が開いてくれた

日本人の同僚と話すことは稀だったが、休憩時間のときに「タダで遊べるところが近くにある」と言ったのを、福子さんは聞き逃さなかった。詳しく尋ねると、市民交流センターにしなり（16年3月

閉館、本誌105号参照）で卓球ができるということだった。卓球は未経験だったが始めることにした。センターで韓国語が話せる友人と卓球を楽しんでいたある日、別の韓国人が話しかけてきて、西成教室を紹介してくれた。

福子さんが西成教室に通つて3年ほどが経つ。教室と相性がよかったのだらうか、取材では言語上の支障はまったくなかった。福子さんによると、この教室の良いところは、学習パートナーとマンツーマンで会話しながら勉強できる点だ。

興味深いことに、福子さんがいまの学習パートナー（韓国語を学ぶ大学講師）に韓国語の発音を教える場面もあるそうだ。「教える／教わる」立場が明確に逆転すると、それまでにない交流のかたちが生まれ、より強い信頼関係が築かれることだろう。そうした場面を数多くつくるような機会が教室以外にもあつていいのかもしれない。日本語で自分の意思を伝えられ



西成識字よみかき・日本語教室の仲間と近くの公園で

るようになって、福子さんは「気持ちすごく楽で、幸せに生活を送っていて嬉しい。これまでは誰かに頼まないとできなかった」と語る。福子さんは、ゆくとあいの居場所事業「卓球サークル」にも顔を出すようになった。日本人の友だちは主に卓球の仲間。ウォーキングも一緒にするようになり、明石海峡大橋や琵琶湖に行ったことをとても楽しそうに語ってくれた。仕事に明け暮れた日本での20年の後に訪れた「幸せ」が、いまの福子

さんの生活のかたちだ。

言語の壁を乗り越えるツール

モディ・ブランジャールさんは、インドのラージャスターン州ジャイプル生まれの高校生（17歳）。生まれてすぐに日本に来たが小学4年生から故郷の学校で寮生活を始めることになる。家族はそのまま日本（大阪市西区に在住）に留まり、会社を経営されている。モディさんは夏の長期休暇を利用して日本

に滞在し、複数の日本語学校に通う日々を過ごしている。西成教室はそのうちのひとつであり、とくに漢字の音訓の読みを勉強しているそうだ。

モディさんはすでに近い将来の人生設計を明確に描いている。彼が現在、足繁く日本語学校に通うのは、経済学を英語で講義する近畿圏の大学に入学するためである。その後、MBAを取得し日本でマーケティングの仕事に就きたいそうだ。あまりに快活な彼の姿に、筆

者は目が眩むような思いをした。

そんなモディさんに、日本語しか話せないわたしたちと在留外国人のあいだに立ちはだかる「言語の壁」を克服する方法を尋ねてみた。すると、事もなげに「グーグル・トランスレーター」という便利なアプリがありますよ」と返してきた。ミートアプリで知り合った外国人らと西成のスポーツセンター（岸里）で遊んだことがあるとも教えてくれた。「アプリ」…、嗚呼、ああ、そういう便利な時代に生きていたのね、わたしたち。今度、試してみよう。

中間のまとめ

1）家族の強い紐帯が日本での生活にある程度安定させている。その安定性がホスト社会に対して閉鎖的に働くこともあるが、二人の場合は必ずしもそうではないようだ。

2）日本語ができるか否かは、日本社会での生活の質に大きな影響を与える。



グーグル翻訳でヒンディー語にしてみた。「便利だね」

3）西成教室には、他の日本語学校・教室には見られない特徴（長所）がある。

4）二人とも日本にとっても良い印象を持っている。他国と比較できる視点をもつモディさんは「便利だし安全だし、みんな優しい」と好意的に評価する。福子さんは中国で観た映画から受ける印象と現在の日本社会との著しいちがいを指摘する。

番外）アプリを試してみよう。

文責：若松 司



第2回

子育てに取り組む人・団体・施設を紹介して、子どもを支えるネットワークをどんどん広げていきます！

ふらっと寄って、休憩してや！
ステップメイト



かける制服に気づいて「この制服が西成高校だったのか！」とごく身近な高校であることに気づきました。

日本初の取り組み

過去の『なび』（107号）でも紹介されていましたが、西成高校は地域の署名運動をもとに1974年に開校しました。知的障がいのある生徒を積極的に受け入れたり、普通科総合選択制の導入など様々な取り組みをいち早く実践されてきました。大

『なび』ではこれまでもいろいろなところで実施されている居場所事業を紹介してきました。今回は西成高校の校内で実施されている居場所「ステップメイト」の紹介です。筆者自身が仕事をきっかけに西成に関わるようになって長いのですが、今回訪問するまで西成高校について全く知りませんでした。訪問した時間帯がちょうど下校時刻だったので沢山の生徒さん達が校門から出てくるタイミングでした。いつも商店街で見

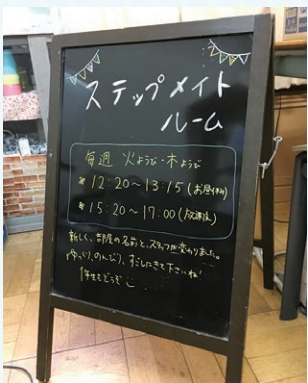
阪府のエンパワメントスクールにも指定されています。今紹介する居場所事業も、日本初の取り組みとして2012年9月に開始されました。その後、同様な取り組みが他の高校にも広がり、今年度は大阪府内の6校で実施されています。開始当初から昨年度までは「となりカフェ」の名称で実施されていましたが、今年度から「ステップメイト」と名称を変更し継続されています。今回は校長の山田先生、教頭の内田先生からお話を伺いました。

気分転換して学校生活の充実を

高校生たちは授業やクラブだけでなく、家の手伝い、学習塾やアルバイトなどで毎日を忙しく過ごしています。短時間の休憩で気分転換することで、学校生活を充実させ、退学を防止したいというのがこの事業の目論見。週に2日、昼時間や放課後に居場所を提供するために部屋を開放し、

お菓子や飲み物などを準備してスタッフが待機しています。スタッフは生徒が親しみやすいように年齢の近い男性と女性が各1名。特に何をするでもなく、立ち寄って休憩したり、スタッフと会話を楽しんだりして休憩します。利用する生徒は10〜20人のことで、学校を訪問した日も17時の終了間際まで生徒たちで賑わっていました。先生方は、生徒が気軽に利用できるようにステップメイトと距離を置き、時間中は近づかないように徹底しているそうです。

レポート：沖田一志
寺嶋公典



営業時間のお知らせ



(左)ステップメイトの室内の様子(中)玄関に飾られている校歌(右)気持ちよく晴れた朝の西成高校

【飯島照喜】飯シュラン復活、西成を羽ばたき、もっと遠くへ！と言っても大阪府内。ポリシーはあくまで主観的、自分目線、ちょっと考えないといけないかと、ちと不安。そんな思いが横切りました。



【沖田一志】全国のラジオが聴ける有料サービスを申し込んでしまいました。ひとりで居る時や電車の中ではスマホを使ってラジオを聴いています。プロ野球中継のあるこの時期は特に重宝します。



飯ユブ★

メン

13軒目

『かどや食堂』



意外と好評を博していたらしい完全主観のグルメ記事、飯ユラン。隔月連載で復活しました。西成から解放たれ、お気に入り『食』にまつわる店、人などを紹介します。



懐かしい“おふくろの味”がモットーのかどや食堂。東大阪市営荒本住宅9号棟1階が店舗。正面左側が厨房、右側が店舗、前にはオープンテラスにテーブルが2客。決して見栄えはしない常連たちの店だ。

「コロッケください、いやコロッケ定食ください」「今日ではんぶら定食、てんぶらにコロッケを添えてあるよ」。でも、常連の私、ちょっと無理を言ってコロッケだけの定食にさせていただいた。

トレーには白いお皿にグリーンのキャベツ、その上にコロッケ、このシンプルさが重要だ。主役であるコロッケを一層際立たせる。脇役の味噌汁も重要だ。NPOの理事長・山尾さん「コロッケだけでは…」とピーマンのてんぶらをおまけしてくれた。この心づかいに感謝。

コロッケは好物の一つだけに、味や食感にはちょっとうるさい。見た目はラグビーボールのようで、ボリュームを感じさせる。まずはお箸でカット、口にいれると、カリッと揚がっているので気持ちのいいサクサク感、たまりません。裏ごしでなく手でつぶしたゴツゴツのジャガイモ、そのかけらが口のなかを攻撃している、甘みを持って、さらにそれに絡みつくすじ肉。玉ネギはどこだ、ここではあえて裏方に。小麦粉、ジャガイモ、すじ肉、玉ネギ、なんとシンプルな素材。何もかけずにそのまま食べるのが一番、もの

足りなさを感じさせない。いくら食べても飽きさせない。

食堂の運営はNPO法人生きがい事業団「かどや」。高齢者の生きがいと人権のまちづくりを目指す社会的企業である。食堂でつぶやかれた地域の声から産れた就労支援の活動もし、現在は子ども食堂も実施している。

コロッケは愛されている。私が子どものころには五月みどりさんが「コロッケの唄」（浜口庫之助作詞・作曲）で「今日もコロッケ、明日もコロッケ…」と歌っていた。最近では「キテレツ大百科お料理行進曲」にコロッケの作り方が歌われている。市民の祭りでも午前中で300個完売するほど人気があった『かどやのコロッケ』。

コロッケばかりじゃなく「味噌汁」も。毎日つくる人が変わるの、いわば5人のおふくろの味が楽しめる。ごはんも味噌汁もおかわりできる。ごはんがなくなりそうになると、「おかわりしましょうか」とおふくろさん（店員）…。かどや食堂の定食、味付けや盛り付けだけでなく、お客さんへの気遣いもまさに「おふくろの味」である。

かどや食堂

場所：東大阪市荒本 2-4-9-104
電話：06-6788-0148
営業時間：11:00～16:00
定休日：土・日・祝日



今月のお隣さん

孤立をおそれず、紙面でつながる地域の輪

矢田常子（やだつねこ）さん

今月のおとなりさんは、隣保館で毎週土曜日（第2土曜日は休み）に開催している「元気体操」の講師（ボランティア）・矢田常子さんです。マラソン、水泳、自転車、カラオケ、卓球、ウォーキング、あみもの、とめっちゃ多彩な趣味の持ち主。健康のためと苦しい事にチャレンジするうちに趣味が増え、今はスポーツ指導員協会公認の指導員でもあります。モットーは「何事もチャレンジ!」「自分にできることで人の役に立てることが幸せ」という矢田さんでした。

ハナレバナレになった人とまち。くらしの窓から、紡ぐヒントを探してみる。

たぐの 3くふうたま

昼間

あいま

6畳2間も写真が入ってすっかり様変わり。自転車旅ではその雰囲気を感じ取りたいとカメラを向けるが、いつも入りきらない。性分が、気付けばまたそこに立っている。（安田拓也）



しばらくそこに身をゆだね佇んでいると、確かにそこにある彩りが見えてくる。

これだけで、お互いの様子が伺い知れる、ゆるやかで確かな安心感。

それと僕たちは意識せずとも、ごく私的な、そして外向きの半ば公的な領域を持つている。その2つ

が交わる場所（中間領域）では、その空間をカラフルに彩るいろんな営みが行われる。そんな「あいま」な場所をどう捉え、将来に繋

げてゆくか。

「ああそう。」

知らぬ間に長話。自転車と人がすれ違うときは、いつものように器用に体をひねり、路地を通る人はほとんどが顔見知り。だから、「お父さんまた送ってきてん。」

はなくとも生活感漂う独特な空間がある。

「ヒューマンスケール」という少し馴染みのない言葉があり、要は広すぎず狭すぎず、ちょうど心地良い空間というわけ。

花に水をやろうと玄關扉を開けると、向かいの人と鉢合わせ、知らぬ間に長話。自転車と人がすれ違うときは、いつものように器用に体をひねり、路地を通る人はほとんどが顔見知り。だから、「お父さんまた送ってきてん。」

今回のお題はこのまちならではの入り組んだろじ。

西成にはいろんな表情をした路地が沢山あり、人の姿は広すぎず狭すぎず、ちょうど心地良い空間というわけ。

花に水をやろうと玄關扉を開けると、向かいの人と鉢合わせ、知らぬ間に長話。自転車と人がすれ違うときは、いつものように器用に体をひねり、路地を通る人はほとんどが顔見知り。だから、「お父さんまた送ってきてん。」



少し低めの視線ぞみる路地



【西田吉志】日曜日に地元の若者をつれて、夕ヶゴルフに行った。正直ゴルフはそんなに好きではないけど、天気にも恵まれ大自然に囲まれて清々しい1日を過ごした。スコアはいつもどおりやった。



【谷口円】内容口外禁止の展示「ブラックボックス展」を見に六本木まで行ってきました。賛否両論になるであろう内容でしたが、「The World is You」を体感させられる仕組みに私は拍手。



【田岡秀朋】ゆ〜とあい3階のスターブレインズで6月から児童の送迎がスタート。ドタバタの中、何とか形にしたスタッフや地域・関係者のみなさんの底力に脱帽です。



【佐々木敏明】人波がカタログとなる衣替え

号外 マナビバ！通信

「まずは、おいでよ。」ゆ〜とあいには中学を卒業してから進路を一緒に考える場所と時間があります。そんな“フリースペース マナビバ！”の徒然な日常をお伝えします。

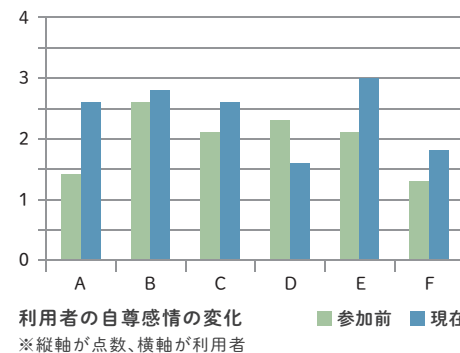
マナビバは毎週火・木曜日の10:00～16:00、ゆ〜とあい2階でオープンしています。
電話:06-6561-8801 Mail:info2@human-ref.jp



若者の自尊感情

マナビバの参加前と現在(約1年の利用)で「自尊感情」と「ストレス反応」がどのように変化したかを探ろうと、利用者アンケートを実施しました。自尊感情では、「私は自分に満足している」「自分を失敗者だと思いがちである(R)等の10項目に「はい」4点、「どちらかといえばいい」3点、「どちらかといえばいいえ」2点、「いいえ」1点で得点化し、(R)項目はマイナスの得点として、その平均値を調べました。

8名の登録者のうち、6名の利用者から回答を得た結果では、利用者1人を除いて、全員が参加前よりも自尊感情が高まっていることがわかりました。とりわけ利用者Aさんの変化には特筆すべきものがあります。現在は、通信制高校に通いながら、週3日のアルバイトを始め、マナビバにはイベントのみの参加になりましたが、「マナビバで自信をつけたからアルバイトに挑戦できた」(利用者Aさん)



と、マナビバをステップに次のステージへ進もうとしています。社会に自分の居場所があることが、若者の自尊感情に大きく影響をもたらしたと思います。似た境遇の仲間と出会い「自分だけじゃない」という「安心」を実感できたこと。いろいろなメニューを体験する中で「今からでもやりなおしはできる」という「自信」を持てたこと。この2つがネガティブな自分の過去に対する評価の改善につながったのでしょうか。まずは、一度遊びに来てください。

文責：阪井 茂

い湯かげん

アベを止める処方箋はないのか

「どうやってたらアベを辞めさせられるか？」依然安定した支持率を誇る安倍首相だが、巷にはそんな会話が広がっている。

小泉純一郎、野中広務、古賀誠、山崎拓等々の自民党長老は、原発再稼働、安保法、秘密保護法、共謀罪、憲法改正等々の安倍政策を真っ向から批判されている。さらには森友、加計学園問題についても疑念を表明しておられるし、詭弁と野次とせせら笑いを繰り返す首相に「品がない」と戒めておられる。この一連の間違った「政策」を強行させているのは「1強」という「政局」であり、その背景には「小選挙区制」があるというの、期せずして一致

した見解だ。礼を失するかもしれないが、かくいう自民党長老の現職時代の責任も免れないから、「こんなはずじゃなかった」と後悔されている発言なのである。それは民進党や野党にも言えることだから、小沢一郎さんも動いておられるのだろう。そして、1強を創り出した政局、選挙制度が、自民党の個々の議員を拘束し、公明党の政策も歪めるという連鎖を生んでしまっているのではないのか。そして、困ったことに、国民もこの政局と選挙制度によって、現状の「消極的承認」に誘導されてしまっている。それが安倍首相への高い支持率となっているわけだ。

さて、「安倍さん」を「橋下さん」或いは「維新の会」に、「憲法改正」を「都構想」に置き換えてみると、いま大阪市政が陥っている状況に酷似している。「大阪府は今のままでいい」では、橋下さんのキャラクターや維新政治を評論するだけで、橋下(維新)との改革競争にはならないのと同じように、「小選挙区が元凶」では、原発や憲法という「政策」からの逃避と映る。ボクは、都構想には参加の自治」という対案、安倍政治には「競争に代わる共生」というような対案を示して「政策を問う」こと、それが「アベを辞めさせる」方途だと思う。

㈱ナイス代表取締役
富田 一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

散っているし、何より、教育や福祉がどう変わるのかなど、市民生活との関係はほとんど議論されていない。国と比べると大阪府は小さい。市民活動や社会運動などの様々な小さなアクターが「外国籍住民は住民投票に参加できないか」「NPO等市民活動と町会との協働はできないのか」等々、井戸端会議やSNSを活用したコミュニケーションを広げること、はたまた、総合区の政策合意を実現することで、実のある政策競争を演じることが可能ではないか。その結果如何で、都構想(大阪市の解体)は止められるし、アベ暴走を止める力にもなりうる、ボクはそう思う。

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちに皮算用していることを語っていくよ。

先日5月18日にわかくさ保育園の西野さんを迎えた学習会を開催した。参加者は19名とやや少なめだったが良い学習会だった。子どもたちとどのように向き合うのか？遊びの中で子どもたちが何を学び、大人とどのようにかわるのか？子どもたちの一つひとつの経験がかれらを成長させる。そんな話だった。

今の時代、大人が大人の価値観で子どもを枠にはめるなんてことは間違いだと気づく。でも、大人が作ったモノが巷にあふれ、インターネット社会で小学生もスマホを持ち、あふれる情報に振り回される。情報をコントロールできない子どもたち。西野さんのお話は、子どもたちが土に触れ、木材や段ボールで自分たちの要塞をつくり、多少ケガをしながらも成長していくのを見守る大人になろうということだと理解した。今の小学生が10年後、地域の若者として地域で活躍できる状況を作りたい。(寺本良弘)



【若松司】いつも見る電車内の液晶パネルでは4カ国語で駅名が案内されている。ふと、ハングルで表現されているのが「音」なのか「意味」なのか気になった。駅名ならば「音」のほうが意味があるはずなんだけど。



【山村裕太】今月号より『なび』編集部となった山村です。私のイラストを佐々木さんが描いてくれるそうです。左のイラストはきっとカッコいいものになっていると思います。とても楽しみです。

地域の縁を心でつなぐ

松崎 寺 公 典 心の時間

「悪いこと、ずるいことをして良い暮らしが出来たとしても、その報いは、子や孫に行くから、悪いことをしてはいけない」という話に共感しました。現代には「今さえ自分さえ良ければ、後のことや他の人がどうなっても関係ない」という風潮を感じます。その結果、環境破壊をはじめ解決しなければならぬ問題を次の世代へ押し付けています。自分の「いのち」は自分だけのものではなく、親やご先祖様から授かった大切な「いのち」であり、後の世代にとっても大切な「いのち」です。

「心の時間」は心の成長を大切にする時間です。心の成長とは、智慧が深まり、見えなかったことが見えてくることの喜びでもあります。「おかげさま」「おたがいさま」という日本語があります。「おかげさま」とは、光を浴びることで「かげ」が出来ることから、色々な光に遭えた喜びの言葉です。「おたがいさま」も、互いに支え合って生きる人がいることを喜ぶ言葉です。「心の時間」を大切に、これまで気づかなかった喜びを感じ、一日を過ごしたいですね。

松向寺 通法

「勉強したいこと」と「働くこと」

今年6月設立のNPO「ネム21」の取り組みで、立命館大学茨木キャンパスに、西成の小・中・高生と見学に行ってきた。2015年に建てられただけあって、茨木駅から数分の距離、ガラス張りの建物のいたるところにミーティングができるようなスペース、スターバックスやコンビニ、図書館、広場など市民が利用できるようなしくみなど、とても魅力的な空間だった。その中で、印象に残ったのは自分たちの興味・関心があることを勉強して、とても充実している様子でキラキラしていた大学生。こどもたちに一生懸命に丁寧に自分がなぜ大学で勉強しているのかを伝えてくれた。ただ、就職の話になると、勉強していることを活かせるような仕事はなかなか見つからなく、奨学金を利用して大学生もたくさんいて、公務員や安定した給与を出してくれる企業を探さざるを得ない様子だった。そんな大学生も応援できるような隣保館になっていきたいと思うのは欲張りすぎか？

COUNT 2.99

隣保館などで事業を行う中で感じたことをつぶやいて、西成のまちづくりに役立てていきます！



なび編集長 寺嶋公典

smile
ゆーとあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆーとあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび 7月号 (vol.125)

発行日：2017年7月1日(創刊日：2007年1月1日)

発行：株式会社ナイス

発行人：代表取締役 富田一幸

住所：大阪市西成区長橋 3-6-33

電話：06-6563-1156

E-mail: info@nice.ne.jp

url: http://www.nice.ne.jp/

編集長：寺嶋公典

編集：飯島照喜、沖田一志、佐々木敏明、田岡秀朋、

西田吉志、安田拓也、山村裕太、若松司（あいえお順）

イラスト：hidarimaki デザイン：谷口円